佐原の町並み かわら版

第５８号
平成２８年８月

発行　ＮＰＯ法人小野川と佐原の町並みを考える会
佐原町並み保存会

お問い合わせ
佐原町並み交流館
電話　0478(52)1000

「町並み案内班」が香取市表彰　20年を越える地道な努力に対して

平成18年（2006）3月27日に佐原市、小見川町、山田町、栗源町が合併し香取市が誕生して10年目を迎えたのを祝して、その発展に貢献した団体の一つとして、「NPO法人・小野川と佐原の町並みを考える会」の「町並み案内班」がその活躍を認められて、表彰の栄誉に浴しました。

案内班々長の越川悦子さんと班を立ち上げた吉田昌司さんにお話を伺いました。

越川　悦子さん・談

案内班全員がこの表彰を喜んでいます。二十年前に吉田昌司さんの講習を受けた仲間が赤煉瓦の三菱館でお茶の接待や電話番をしながら頑張ってきました。

案内班リーダー　越川さん

今は交流館を拠点として、夏の猛暑の中でも、冬の寒さの中でも元気に館を出て、待っている観光客を案内する会員達の佐原を愛してやまないこの活動が認められたと思います。

案内班員を増やす為に平成二二年度に「町並み」の講習を八回、平成二七年度に二度目の講習八回を行い会員が増えてきています。

私達はどんな時でも「さわやかハートでおもてなし」をモットーに、訪れた人々に佐原の良さを心のお土産にして持ち帰っていただきたいと願い活動しています。

最近はリピーターも増えて来ているのが嬉しいです。

吉田　昌司さん・談

地味な活動が表彰されて大変名誉なことです。平成八年十二月に佐原が重伝建地区指定を受けた時、佐原の素晴らしさを知ってもらう方法は何かを考えました。

平成八年五月の佐原の歴史講座開始の頃には、すでに三菱館で活動していた「考える会」と平行して、観光客を「現場」に案内して説明する活動を始めていました。最初は数件でしたが重伝建地区指定後はテレビの影響で爆発的に観光客が増え、今は年間一万五千人以上のお客様を案内しています。

私は当初より、千葉県内の公民館の方々に「佐原にぜひ来て下さい」とお誘いしてきました。その折、自分の町を誇りにして頑張って下さいとも言ってきました。講師として出掛けて行き激励もしました。その後、多くの町の公民館活動で「ふるさと学習」が生まれてきたのは嬉しいことです。

忠敬を尊敬し、歩く歩く92歳　吉田さん

佐原が「日本遺産」に

記念館前で日本遺産認定を喜ぶ会員達

平成二八年四月二五日、佐倉、成田、佐原、銚子が「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」として「日本遺産」に認定されました。翌二六日の午前、伊能忠敬記念館前の広場で香取市主催の祝賀会が行なわれ、「考える会」の会員も多数参加して喜びを分かち合いました。

「考える会」の主な事業

各月第一日曜日は骨董市。五月はゴールデンウィーク中、一日に第百十九回、五日に第百二十回を開催。

三月十二日　雛めぐり。さわらぼ。
三月十九日　第八回散策しながら地元を楽しむ会・まとめ
三月二三日　防災訓練

小野川へ向って放水訓練

四月二三日　成田空港空市にて、伊能忠敬歩測体験を実施
五月十四日　栄町で伊能忠敬、歩測・地図づくり学習体験事業
五月十七日　総会
五月二二日　竹灯りワーキング（二八日、六月十八日にも）
五月二五日　クラブツーリズム地図づくり案内（三一日にも）
五月二九日　小野川清掃
六月一日～二日　クラブツーリズム地図づくり案内
六月五日　さわらぼ開催（清掃）
六月十日　地図づくり・発掘香取遺産の旅

次頁下段へ↖

蔵のまち・喜多方市と意見交換会

さる六月二九日（水）～三十日（木）の二日間、福島県喜多方市から観光ガイドに携わる十一名と喜多方市の職員四名、また香取市「小野川と佐原の町並みを考える会」からは案内班を中心に十五名と香取市の職員三名との意見交換会が行なわれました。両市の交流は二年目ごとに行なわれてきていて、旧山田町と喜多方市との交流を引き継いでいるものです。

時間一杯を使って

第一日目は、佐原町並み交流館二階で、午後三時から意見交換会が行なわれました。

まず香取市側から出席者の自己紹介から始まりました。各メンバーが町並み案内をすることになったいきさつと歴史ある町に誇りをもって活動できる意気込みを、喜多方市の皆さんに熱心に伝えました。

それを受けて、喜多方の皆さんも同じような立場から、深い思いを伝えようと懸命につとめましたので、予定時間一杯まで話しが尽きないという状態でした。言い残した部分は、当夜の懇親会に持ち越されました。

喜多方市の様々な特徴

喜多方市は、いま、重要伝統的建造物群保存地区の選定を目指しています。また、佐原とは違って、蔵が外部に露出していないので家の中に入らないとわからないという特徴があります。

広い町のそれぞれ特徴のある観光地点に、喜多方観光物産協会が運営する六ケ所の案内所があります。町歩き観光ガイドは十四名が登録されていて、観光コンシェルジュという資格も取得されています。現在登録者数は一〇八名いるそうです。

案内は「通常コース」ガイド一名に付二時間二千円、「とっておきの蔵めぐりコース」ガイド一名に付三千円と有料で、雨の日のために「おもてなしの傘」の無償貸し出しがあります。

佐原への熱い思いを喜多方の方々に伝える

質問や意見が次々に、議論は時間一杯まで

二七年度の案内件数は一二四件、参加人数は二、七八七名で喜多方市の観光客入り込み数は百八十万余名。

市では、地域の特性を生かした「花めぐり」コース、特に約二百万本のひまわり畑（三ノ倉高原）も売り出し中。

喜多方の皆さんが驚かれていたことは、佐原の案内班が「考える会」の会員として登録されていて、会費を納めながら案内ボランティアをやっていることでした。佐原のような組織は全国でもめずらしいことなのです。

二日目は十時より佐原の「考える会」の案内班メンバーが伊能忠敬記念館と町並みを案内した後、各自が自由に昼食をして、再会を約して別れました。

喜多方市長より礼状

「前略。皆様には、意見交換会及び町並みガイドを通じて実践活動をご紹介いただき、大変学びの多いものになったと伺っておりますので、当市の観光ガイドの参考にしてまいりたいと存じます。

今回の交流事業を通して、民間同士の交流が促進され、市全体に交流の輪が広がることを期待しているところであります。

今後とも友好都市関係がさらに深まるよう、交流を推進してまいる所存でございますので、尚一層のご支援並びにご協力を賜りますようお願い申し上げます。後略」

喜多方市長　山口信也

佐原の蔵店を熱心に見入る喜多方の皆さん

↖前頁下段から

六月十三日　空き店舗打ち合わせ・都市整備課

六月二九日～三十日　喜多方市・蔵のまち交流会とガイド

佐原町並み交流館行事

四月九日(土)～五月十五日(日)　佐原五月人形めぐり展示

五月二三日(月)～六月三日(金)　「樋の道」切り絵・サークル作品展（野口正博講師）

五月二八日(土)～六月二六日(日)　あやめ祭・シャトルバス町並み観光案内

五月二九日(日)　小野川清掃

六月四・五・十一・十二・十八・十九日　小野川両岸歩行者天国

六月四日(土)～五日(日)　古河博章「色鉛筆・蛍光ペン体験絵画教室」

六月七日(火)～十二日(日)　日本盆栽協水郷佐原支部盆栽展

六月十四日(火)～二一日(火)　橋本健司「佐原の町並み・大祭を描く」作品展

六月二二日(水)～七月二三日(土)　佐原の光景写真展（佐原フォトサークル四季彩、他）

七月三一日（日）香取市国際交流協会「日本文化体験・身近にお茶を楽しむ会」

八月一日(月)～十七日(水)　北澤聖江「佐原・大祭・母と子と」絵画展

九月十七日(土)～十月一日(土)　魚谷幸子「時の流れに感謝して・

伊能忠敬の「考え方と生き方を学ぶ」「歩測と地図づくり体験」事業

佐原には「町並み・祭り・伊能忠敬と香取神宮の国宝」など長い歴史の中で育まれた沢山の宝物があります。さらに佐原ならではの魅力的な宝物がもう一つ増えました。それは、「歩測と地図づくり」体験を取り入れた観光事業です。

この事業は、世界最初の実測日本地図完成という偉業をなし遂げた伊能忠敬の「考え方と生き方を学ぶ」ことと、当時使用された測量器具や方法を参考にして当会が手作りした器具を使いながら「地域の地図を作製する」体験学習を行ないます。

本事業は、成田空港を取り巻く九市町を対象に「成田空港地域共生・共栄会議」が地域の共栄につながる事業の一つとして当会と協働で取り組む助成事業に採択されたものです。

平成二十六年度は「伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会」が「忠敬ウォーク」の一つの部門として「歩測と地図作り」を担当しましたが、平成二十七年十月～二十八年は「伊能忠敬、歩測・地図づくり体験学習事業」として当会が担当実施しました。

富里、岩崎久弥別邸公園にて歩測体験

二十七年度に実施した団体数は六件、参加者は百五十七名でした。二十八年度も各地の教育委員会、小学校、クラブツーリズム、ＪＲ、ウォーキング協会など多くの団体から申し込みをいただき、香取市内だけでなく、他地域にも出張して実施しています。参加者のみなさんには大好評で、本事業が順調に進展していることを感じます。

旅行会社によると、最近は「テーマ」を持って観光地を訪れる体験型の旅行に人気があるということで、本事業がこれからの佐原観光の宝物になると期待されます。

成田空港の空市に歩測体験事業で参加

＝募　集＝

「地図づくり」に関心のある方、一緒に活動してみませんか。みなさまの入会をお待ちしております。

連絡先：ＮＰＯ法人「小野川と佐原の町並みを考える会」
℡０４７８・５４・７７６６

☆見直される地方都市の看板建築☆

蜷川家具店の洋風装飾

関東大震災後、東京を中心に関東の各地方都市で流行した看板建築が、段々と少なくなってきましたが、最近になりその稀少性ゆえに人々の関心を集めて、わざわざ見学に訪れる人が増えているということです。

昭和の看板建築の代表例の一つが「佐原町並み交流館」の真ん前にある「蜷川(にながわ)家具店」。今では、貴重な歴史的遺産だと思います。

看板建築とは、本体は、伝統的な木造の商家ですが、建物の正面を垂直に立ち上げて、モルタルや銅板、タイル、スレートなどの耐火素材を使いながら、洋風のデザインで装飾した建物です。

蜷川家具店は、昭和五、六年頃に建てられた瓦葺・切妻造りの二階建ての木造建築で、正面はモルタル塗りの擬石仕上げです。

一階の両側は、石積み風の柱型で、二階は三連の縦長窓に木製サッシ、窓の上の軒蛇腹にも凝った装飾が施されており、最上部のアーチ型の中に「屋号」が装飾されています。〇中のサはサワラ、〇下の「一」はタンスなどの製作所が数ケ所あったのでデパート部を一号と表示したのではないかというのが当主のお話です。

蜷川家具店は、大正初期に開業し、当初は桐たんすなどの家具類、小物類の製作をしていました。平成九年に看板、外壁などを景観に合わせて改築、修繕しました。現在は、左側に、小物を商う素顔屋（すっぴんや）を併設しています。

（玉造　功）

佐原との出逢い」水彩画展
十月八日(土)～二八日(金) 古河博章「色鉛筆で描く佐原の町並み」作品展
十一月五日(土)～二十日(日) ミニチュア研究会代表・橋本京子「ミニチュアフード・ドールハウス」展

「さわらぼ」の活動

香取街道の旧土屋刃物店を利用し二年前から佐原高校生と東京大学大学院生との共同で、空き店舗を利用する地域住民との交流拠点づくり活動を行なっています。

夏の佐原の大祭には建物を公開し、沢山の見学者を接待しました。

また、七月二三日に成田市文化芸術センターで開催された第一回景観セミナーには佐原高校生三名が参加し、歴史を感じる建造物再生について報告しました。

夏の大祭にて「さわらぼ」公開

町並みを歩いて（その十三）

重伝建地区の隠れた魅力を発掘

小野川の生物

「正上」前の浅瀬に「ナガバコウホネの生育地」という標識がある。

コウホネはスイレン科の多年生。根茎が骨のように見えるので河骨といい、浅瀬や沼や池に自生する。小野川の流れの緩やかな数箇所に移植を試みたが不成功だったという。

コウホネ属は北半球の温帯に二十種、日本では四種ほど。

小野川の数ケ所に自生するナガバコウホネ属は、千葉県では小野川のみが生育地で、千葉県指定の最重要保護生物となっている。

六月頃水上に黄色い花を咲かせる。小野川は水位が大きく変動するので、種子を形成せず根茎を伸張させ沈水葉のみで生育する。根茎は川骨（センコツ）という日本薬局方の生薬で解熱や鎮痛に薬効があるという。

観光客から「この川に魚は住んでいますか」とよく質問される。

魚は定着しないが、かつてウグイや鮒がよく釣れたという。逆流防止のダム建設以前、夏には鰻の稚魚が無数に船縁に張り付いていた。利根川の本流から遡る鯉、鯰、ボラの幼魚が見られる。

6月、ナガバコウホネの黄色い花が

外来植物に注意

最近、目につくのが、アメリカ原産の外来植物ウチワゼニグサ。別名タテバチドメグサ。長根を持つセリ科の植物。熱帯魚の水草用だったものが定着し、石積みの下方の植栽面に繁殖している。豪州では大繁殖しているという。

米国原産外来植物ウチワゼニグサが

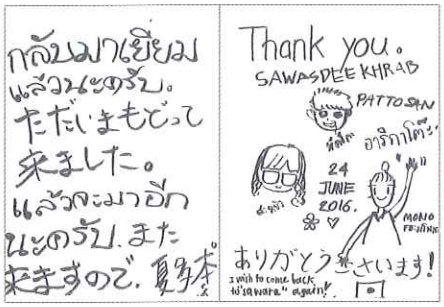
観光案内に感謝の礼状（その16）

ナッタポン・パンノイ教授（タイ、バンコックのチュラロンコン大学、都市計画学科）を紹介します。氏は東京大学大学院で学んでいた時、香取市役所の職員と共に町並み整備に協力し、忠敬記念館駐車場を囲む和風塀などのデザイン設計をしました。

平成27年７月18日と、また今年の６月24日に大学の学生35名を引率して佐原にやって来ました。

日本へ来ると、佐原へ立ち寄るのが恒例で、町並み交流館にも立ち寄って町並みを歩くのを楽しみにしています。

学生には日本語も教えているらしく、交流館には日本語のサインを残してくれました。（写真）



夏多本（ナタポン）さんのお礼の言葉（左）とチュラロンコン大学生のサインは日本語も

伊能忠敬第五次全国測量

岡山で越年、忠敬「おこり」で療養

測量隊に規律の乱れ起こる

一行は、文化二年（一八〇五）二月二五日に江戸を発つ。隊員は十六名、隊長忠敬は六十歳になった。

東海道を上り、伊勢山田から鳥羽では木星の衛星蝕を観測した。その間、病人が続出したので、江戸へ応援を頼んでいる。紀伊半島を一周し大阪へ。大阪では十二泊。三七日かけて琵琶湖を測量して、岡山で越年となってしまった。

忠敬が「おこり」で療養

文化三年（一八〇六）岡山から瀬戸内を測量。（その様子が「浦島測量之図」）。尾道から広島へ。四月、秋穂浦（山口市）で忠敬が「おこり」（一定の周期で起こるマラリアの一種の熱病）の症状を訴えた。医師の診察を受けつつ別行動をとる。忠敬を除く一行は下関から松江、三保関（松江市）、隠岐島へ。島から戻った隊と忠敬は松江で合流した。

この間までの道中で隊員達の規律は乱れていた。禁止された酒を飲む者、地元民に横柄な態度をとる者もあり、その様子は遠く幕府の耳に入り、景保からは戒告状が届いた。

若狭から大津、桑名、熱田（名古屋）を経て、十一月に江戸へ帰着すると、忠敬は、さっそく仮親になってもらった平山家の息子・内弟子の平山郡蔵と小坂寛平を破門にした。

忠敬、小普請組に登用

糸魚川の一件につき忠敬は江戸帰着後、二度にわたり「弁明書」を師高橋至時に提出した。忠敬の自信と自負の現れであろう。師は忠敬に対して、厳しいけれど節度ある対応で一切を納めてくれ、幕府からの咎めもなく測量に支障を来たさなかった。

至時は、オランダ語の天文書「ランデ暦書」を解読し、子午線一度が忠敬の計算した二八・二里に近い数字であることを認めた直後、文化元年（一八〇四）正月五日、至時が突然亡くなってしまった。

第四次までの成果による大図六九枚、中図三枚、小図一枚の日本地図が文化元年九月六日、江戸城大広間で十一代将軍家斉の上覧を受けた。

同九月十日、忠敬は、若年寄堀田正敦から小普請組十人扶持に登用されて、組頭渋江新之助の支配下に入る。測量以外は無役だった。（同じ組内に河内山宗春がいた）

間重富に替わり西日本も

天文方を継いだ景保は未だ一九歳。間重富がその補佐役に専念することになり、以後も忠敬が全国測量の指揮をとることになる。幕府直轄の大事業を三十三ケ月で完了する計画であった。